

<減肥ポイント>

- パセリーは養分吸収が長期にわたり吸収量も多いため、化学肥料のみで養分供給を行おうとせず、堆肥や緑肥、土壌改良資材を施用し土づくりを行う。
- 窒素過剰は軟腐病の発病を助長させるため、窒素を過剰に施肥しない。

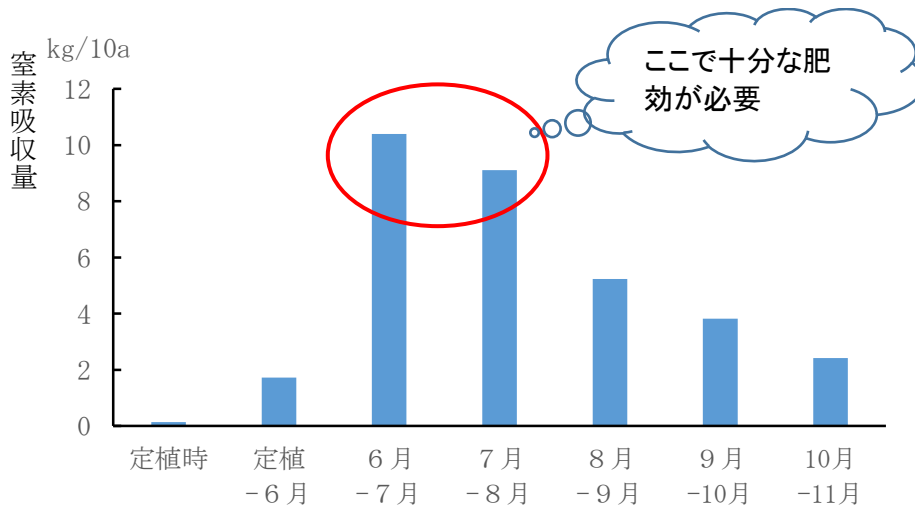
(1) 窒素の総施用量を削減する技術

パセリーの養分吸収量は、収穫による養分収奪が長期間継続するため、葉菜類の中でも特に多い。**10a当たりの養分吸収量は窒素20kg、リン酸6kg、カリ50kg程度**である。パセリーが吸収する全窒素のうち収穫により**収奪される窒素の占める割合は7割程度**である。

養分吸収量の試算値					(平成26年、27年 野菜花き試験場環境部)		
窒素	リン酸	カリ	石灰	苦土	A品	B品	廃棄
養分量 kg/10a					新鮮重 kg/10a		
19.8	5.9	51.8	10.1	3.8	2,350	598	838

長野県野菜基本計画で示される目標収量(2,350kg/10a)を得るために必要な養分吸収量

露地栽培5月定植作型の窒素吸収量は、収穫開始前の6月に急増し、6月から7月にかけてピークとなる。養分吸収は収穫終了まで続く。



パセリーは収穫量に応じ窒素吸収量が増減する。パセリーの窒素吸収のピーク時に十分な窒素肥効が得られるよう肥効調節型肥料を組み合わせた専用肥料を用いるほか、有機物を活用し、肥料、堆肥、土壌(地力)等からバランスよく窒素が供給されるようにする。

(2) 有機物・堆肥中の肥料成分を活用する技術

前記した「Ⅲ 有機物の肥効特性」を参考にして、基肥の窒素成分を化学肥料から有機物に代替して化学肥料を削減できる。また、一部の堆肥については無機化特性や化学肥料代替技術について詳細な研究が行われており、コーンコブ廃培地堆肥は2 t/10a を上限として化学肥料代替ができること（平成18年度普及技術）が解明されている。

〈関連普及技術〉

- ・コーンコブ廃培地堆肥は1年生野菜・花きでは2 t/10aを上限として化学肥料代替ができる（平成18年度普及技術）
- ・コーンコブ廃培地堆肥の窒素無機化及び分解特性（平成18年度技術情報）
- ・土壌診断・施肥診断支援システム「Dr. 大地（ドクター大地）Ver. 3」の活用法（平成20年度普及技術）
- ・0.5M塩酸抽出による家畜ふん堆肥の簡易分析法（平成22年度試行技術）
- ・0.5M塩酸抽出により家畜ふん堆肥の短期的な窒素肥効を評価できる（平成22年度試行技術）
- ・80℃16時間水抽出とCOD簡易測定キットによる畑土壌可給態窒素の簡易判定は長野県においても活用できる（平成25年度普及技術）
- ・早春まきハウス育苗作型におけるパセリーの経時的成分吸収特性（平成27年度技術情報）